

第1回 クッキー コミカライズ賞 応募用原作

応募される方へ

※タイトルとキャラクターの名前は、ご自身でつけてください。

※執筆の際、新たなシーンを追加したり、セリフの一部変更及び、削除は可能です。あなた自身のクリエイティブティを存分に發揮してください。

また、この原作を基に、執筆された漫画をクッキーコミカライズ賞への応募以外に利用、発表することを厳に禁じます。

タイトル…無題

原作…宮川匡代

「こちらの指輪 ステンレスとプラスチックになります」

「は?! イヤイヤ プラチナ台にダイヤモンドって…」

貴金属買取店の査定員が申し訳なさそうに言った

「当店では買い取りはちよっと…デザインは素敵なので 日常使いに気兼ねなくお付けになれるかと」

マジか…ステンレスにプラスチックとは知らずに 大喜びで 6年も左手の薬指にはめていたとは かわいそうすぎるだろ 私……………

今日ヤツに会ったら 叩っ返してやる

貰ったのはつきあいはじめて3か月目

(たとえステンレスにプラスチックの指輪と知っても あの時の私なら心から嬉しかった)

6年間 何度となく通ったヤツのアパートへ行く道を 歩きながら思った

この道を歩くのも今日で最後

「別れて欲しい 他に好きな娘ができた」

「……………へー」

「へーって」

「あーそう わかった」

「……………執着心ねえな それくらいの気持ちだったんだ」

は?! バカなの?!

そう言うしかないじゃん

泣きわめいてすがれって言うのか 今時 演歌でもないわ そんな女

突然 別れを切り出されて どんだけ取り乱したかったか

でも 取り乱したら負け男(コイツ) つけ上がらせてたまるか

大学1年の時から6年

社会人になって毎日のようにキャンパスで顔合わせていた時と同じようにはできないけど お互い都合つけて 時間 作って 会って きたじゃない  
新しい環境で 新しい出会い は 私に だって あった

この関係は ずっと 続く と思って た

私達は うまく いる と

カップルが 別れる 理由

1 他に 好きな 人が できて

2 浮気

3 なん と なく

(私調べ)

まんまと 1位に ハマった とは ……

「連絡したでしょ まとめといってくれた？ アンタの部屋に 置いといた 私物 置き服とか 歯ブラシとか」

「うん 一応」

なに この 平常感 今日を最後に 別れる んです けど  
もっと バツ 悪そう に すると かしら よ

「ちよっと みりんと ナンプラー 入って ない じゃない 回収するよ」

「え？ そんな の ただの 調味料 じゃん」

「わかって ない よね こーゆー と こに 元カノ の 匂い が すん じゃん ☆」

「あー そう なんだ」

元カノ ……

私のことか あらためて 傷付 き な おすわ

どんな 女 なんだろ 今度の 彼女

私より 落ちる 女 でもない 女 でも どっち でも イヤ だな

ベッドの 下に ヒモ T バッグ 押し 込んで いて やるか

「ねえ 紙モノの 写真 なかった よね」

「ない 卒アル くらい？」

「じゃ スマホ 出して 私が 写っ てる 画像 全部 消去 して よ」

「全部 だよ」

「あつたり まえ じゃん あと から なんか ヤバイ の 流出 したら こっち だって 困る んだ よ」

「ヤバイ の なんて ハ●撮り も して ねー し ……」

「いい から 早くー！」

「なあ これ どの だっ け 熱海？」

「箱根だよ ロープウェイに黒たまご 写ってんじゃん」

「あー そうだ 箱根 箱根 黒たまご 殻ごと食ったら 長生き効果100倍って言った  
ら おまえ本気にして 殻ごとバリバリいつてさ」

「言うな！ 純粹 なんだよ！」

「ハハ あ じゃあ これは？ 北海道？ ハワイ？ パリ？」

「北海道もハワイもパリも連れてってもらってませーん❗」

「見て 見て おまえ 白目 白目」

「うるさいなあ 早く消去しなよ！」

「はいはい 消去 っと」

「.....」

目の前で 指先1つで どんどん 思い出が 消えていく  
なかったことになっていく

少しは 迷えよ 躊躇しなよ

「アドレスも アカウントもね！」

「女友達の アドレスも入っているからわかんないと思うけど」

「何言ってるの？ どんなに 混ぜ込んで あったって 勘付くもんなんだよ そもそも

もう連絡とらないんだから 必要ないでしょ！」

「まあ そうだけど」

自分で言ったことが 自分に返ってきて 痛い

でも 強い言葉を使わないと 自分を保っていられない

最初は少し 思いついで盛りあがったけど

今は 黙々と作業を続けている

6年分のふたりの消去

現実感が どっと 押しよせてきた.....

「じゃ 私 これで」

「メシ食ってかね？」

いいけど そういう時間だし どうせ食事はするし ここから 電車で 5つ いったと  
ころのハンバーガーショップでしょ

好きだよ ね コイツのメシって ハンバーガーのことだもんね

「いただきますーす」

カウンターに横並びに座った

コイツの表情を見ないで 食べるのは初めてだ

もう少しすると アレがくるはず

パンズをめくって ピクルスを指でつまんで 「ハイ」って

ピクルス抜きで頼めばいいのに 毎度 毎度 私が食べてあげてた  
仕方ないな

「うま やっぱこれだな」

いつもの わんぱく食いで みるみる 胃袋に投入していく

「・・・・・・・・」

なんだ

ピクルス 食べられるようになったんだ

知らなかったよ

こんなことで ピクルス1枚で 距離を 思い知らされるなんて…

「じゃあこいで」

「じゃあな」

いつもの駅

私は上り ヤツは下りのホーム

向かい合ったホームで ヤツの乗車位置は決まっている

大きなちゃんぽん屋の看板の 決まって小さい 「や」の前

(下ネタかよ…)

まだ帰りたくなくて 離れたたくなくて 泣き出しそうな顔

している 私を見て そこに立って 笑わせてくれた

何本 電車が 来ても ふたりして乗れなくて

やりすごしたこと 何度もあった

向かいのホームを見ると いつもの場所に ヤツが立っていた

バカだねえ そんな習慣付いちやって

もう やめにしないとね

「下りホーム電車が入ります」

電車がホームに入る瞬間 ヤツが肩先まで 手を上げた

「あっ…」

応えようとした時 電車に 遮られてしまった

「お下がりにください 発車します」

中途半端に上げた手を おろせずに 電車を見送ると

ホームにヤツはいなかった

いないのを確認したとたん ちゃんぽん屋の看板の文字が

ゆらゆらと ゆらぎ始めた

仕方ないよ 仕方ないよ こういうふうにはかできない

今日は よく我慢した

よく頑張ったよ

今は 幸せなんか 祈れない  
早く別れる 不幸になれ としか思えないけど  
いつか 穏やかな気持ちになれるかな  
思い出したり 泣いたり ぶり返す風邪みたいに繰り返して  
次の電車が来たら 私も乗ろう  
上りの電車で いこう

指輪の件は武士の情けで黙ってて あげるよ

オワリ